中学年実践例 主題名 「温かい愛情」(家族愛、家庭生活の充実) 教材名 「母ぐま子ぐま」(P.34~P.38)

道徳的価値について

- 児童が初めて所属する社会は家庭であり、人間形成の基盤が家庭にある。
- 自分があるのは、父母や祖父母がある からであるということや、自分に対して 愛情をもって育ててくれていることなど に対して実感をもって考えることから、 敬愛の念は深められる。

児童について

・ 親から何かをしてもらうことへの喜びは感じるものの、自己中心的な考えで家族に対応してしまうことが多く(頼まれたことをしない、約束を守れない等)、自分が家族の一員であるという意識をもって、家庭生活に積極的にかかわることが少ない。

教材について

冬眠から目覚めた母ぐまが、狩人と犬から子ぐまを守るために、おとりになって 必死になって立ち向かう姿から、子どもを思う母親の強い愛情と強さについて、深 く考えることができる。

ねらい

家族の深い愛情に気付き、家族を敬愛しながら、協力し合って楽しい家庭をつくろうとする態度を育てる。

指導にあたって

- 資料の冒頭にリード文を活用して、事前に物語全体の概要を把握することができる。 導入段階で簡単なあらすじの説明や、くまの家族が置かれている状況について説明す ることにより、物語の世界へ入り込み、場面把握ができるようにする。
- わが身を捨てて必死になって子ぐまを救おうとする、母ぐまの気高さや愛情の深さに触れることにより、母ぐまのような強い愛情を自分自身の家族から感じる瞬間について考え、家族への敬愛の念を深めていくようにする。

板書



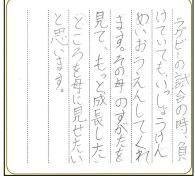
実践記録

	主な学習活動と児童の反応	指導上の留意点
導入	 担任の家族のエピソードを聞き、家族について話し合う。 めあてを立てる。 家族に対して、いつもどんな気持ちをもてばよいだろう。 	○ 家族の存在が普段は当たり前すぎて意識していないことを想起させたり、「家族」について考えていることを発表し合ったりすることで問題意識を高めさせる。
展開	 3 教材「母ぐま子ぐま」を読んで話し合う。 ・ 子ぐまを守るところがすごい。 ・ 母ぐまは怖くなかったのかな。 (1) 想像もできないような元気を出して、動いた母熊の気持ちについて話し合う。 ・ 自分が死んだら、子どもも命にかかわる。 ・ 死んでしまったら、子熊が生きていけない。 ・ わたしが負けたらいけない。 (2) 母ぐまのように、家族が自分のことを温かく見守り続けていることについて話し合う。 ・ 自分が好きなことを続けさせてくれる。 ・ くじけそうになったとき、応援して励ましてくれる。 ・ おいしい食事、あたたかいお風呂など、心地よい場所で元気を取りもどすことができる。 	 ○ 感想を交流しながら、教材の中の話し合いたいことを明らかにさせ、主体的な話合いにつなげていく。 ○「どのような考えで行動したのか」「自分は怖くなかったのか」など、補助を問によりここでのねらいにかかわる多様な考えを出させる。 ○ 母ぐまの思いについて考えたことを踏まえ、家族の自分への思いについるようにする。それで考えを深められるようにする。それで考えを深められるようにする。 ○ と踏まえ、家族の自分への思いについるようなで表えを深められるようにする。 ○ と考えを深められるようにする。 ○ と考えを深いるよ」「分かっているよ」など、家族のと見いと考えさせたり、じっくりと考えさせたりする。
終末	4 今までの自分を振り返って考える。	○ 子どもたちの考えが深まったり広がったりしたところや、実践していこうとする気持ちの高まりを認め、称賛する。勤労感謝の日と関連させ、お世話になっている日頃の感謝の気持ちを伝える活動へと発展させたい。

実践を振り返って

【成果】

- 冒頭のリード文を活用することで、物語の世界へと入り込むことができた。また、挿し絵の活用により、教材を感動的に読み取らせることができた。
- 必死になって猟犬から子ぐまを守ろうと立ち向かう母ぐまの思いや考えを、ワークシートに書くことで、家族の子どもに対する愛情について、深く考えることができた。【課題】
- ・ 母ぐまの強い愛情を考えることを 通して、自分の家族の自分に対する 愛情と関係付けながら考えを深めて いくことが難しいと感じた。「母ぐ まの姿って自分の親だったら…」と 当たり前に感じている親の姿から、 改めてその思いや考えを見つめ直す ことにより、家族という存在につい て改めて考えを深めていくことにつ ながると思われる。





【ワークシートの活用】